

◆理事会(五十音順)

磯村 尚徳	外交評論家
大浦 紀彦	形成外科医
オスタン・ガエル(理事長)	PMC株式会社代表取締役
ダヴィッド・パトリック	麻酔科医
寺島 左和子	形成外科医
原田 昌子	看護師
森川 すいめい	精神科医
山田 信幸	形成外科医
與産 聡	形成外科医

◆事務局(五十音順)

安達 洋子	ファンドレイザー(ドナーリレーション)
阿部 さやか	ファンドレイジングマネージャー
石井 夕美	総務・経理マネージャー
石川 尚	広報マネージャー/証言活動担当
熊澤 幸子	ラオスプロジェクト担当
群柳 奈緒	事務局長
園田 翔平	スマイル作戦担当
玉手 幸一	東日本プロジェクト/ラオスプロジェクト担当
中村 あずさ	ハウジングファースト東京プロジェクト担当
鍋島 宣総	ファンドレイザー(企業パートナー担当)
松井 智美	ファンドレイザー(個人支援者担当)
メシニャック・マジョリ	事務局長アシスタント/プロジェクトアシスタント

◆パートナー(五十音順・敬称略)

寄付・助成金等  
 ㈱アクアリンク/アサヒブリック㈱/アメリカン・エクスプレス・インターナショナル・インコーポレイテッド  
 いちよし証券㈱/㈱エイベックスインターナショナル/エーツーケア㈱/エドワーズライフサイエンス㈱  
 ㈱グリーンテックライフ/(特活)国際協力NGOセンター(JANIC)/コマンドリー・ド・ボルドー東京  
 (一財)ザ・ブラフ・クリニック/(特活)ジャパン・プラットフォーム/ソフトバンク㈱/NAOS JAPAN㈱  
 日本労働組合総連合会/パークレイズ証券㈱/㈱パリュエックス/BNPパリバ証券㈱/ファイザー㈱  
 ㈱フェリシモ/ヤフー㈱/楽天銀行㈱/リンベル㈱/ロレアル財団

※紙面の都合上、金額・継続期間等の基準による按割とさせていただきます。  
 ※2016年度にご寄付いただきましたすべての法人・企業の皆さまに対し、改めてお礼申し上げます。

物品サービス

エクスクムグローバル㈱/㈱農心ジャパン/㈱バンダイ/ブジョー・シトロエン・ジャポン㈱

イベント協力

アンダーズ東京/ヴァローナ ジャパン㈱/ヴランケン・ボメリー・ジャパン㈱/エノテカ㈱  
 LMVHモエ ヘネシー・レイ・ヴィトン・ジャパン㈱/カステルジャパン㈱/㈱クラブメッド  
 グランドハイアット東京/在日フランス商工会議所/シャネル㈱/スワロフスキー・ジャパン㈱  
 日本フロス㈱/バラバシフィック㈱/㈱ファインズ/ファッション㈱/フランス料理文化センター  
 プリムスフード㈱/ボアレ ジャパン㈱/モーブッサンジャパン㈱/モダニティ㈱  
 ユーゴ・エ・ヴィクトール・ジャパン㈱/ル・コルドン・ブルー・ジャパン㈱/ロンシャン・ジャパン㈱

プロボノ

デロイトトーマツコンサルティング㈱/ホワイト&ケース法律事務所

世界の医療団 (認定NPO法人)

特定非営利活動法人メドゥサン・デュ・モンド ジャпон  
 Médecins du Monde Japon

〒106-0044 東京都港区東麻布2-6-10 麻布善波ビル2F  
 Azabu-Zenba Bldg. 2F, 2-6-10 Higashi-Azabu, Minato-ku, Tokyo  
 106-0044, Japan  
 Tel: +81-(0)3-3585-6436 Fax: +81-(0)3-3560-8073  
 E-mail: info@mdm.or.jp

[www.mdm.or.jp](http://www.mdm.or.jp)



世界の医療団

2017年3月発行

2016年度 活動報告書



©Guillaume Piron



©Kazuo Koishi



©Kristof Vadino



©Stephan Lehr



©Guillaume Piron

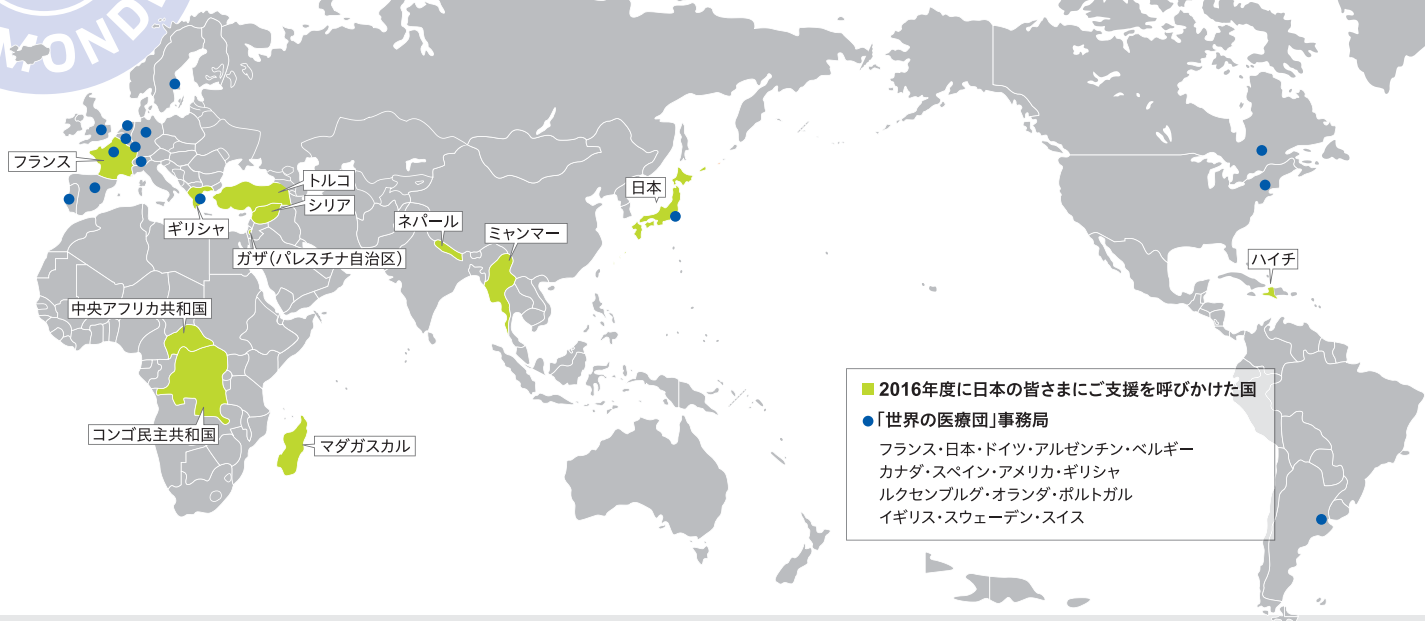


©Mikael Theimer



「誰もが治療を受けられる未来を。」  
 “POUR UN MONDE OÙ CHACUN PEUT ÊTRE SOIGNÉ.”

# 世界の医療団の使命は「治療」と「証言」です。



## 支援者の皆さまへ

2016年3月11日、東日本大震災から5年が経過しました。世界の医療団は、現在も福島県において、「忘れない」「続ける」を合言葉にこころのケア活動を続けています。5年というひとつの節目を迎え、日本中が改めて被災地へ心を寄せ、1日も早い復興を願いました。それから約1か月後、熊本、大分地方を震源とする地震が相次いで発生しました。私たちは医療支援団体としての使命を持って被災地へ向かい、臨床心理士、看護師、小児科医などの専門家が常に相談を受けることができる体制を整えた「親子カフェ」を運営しました。2016年は、日本の災害の厳しさを改めて実感した1年となりました。

国外では、未だ収束の兆しが見えないヨーロッパの難民危機をはじめ、紛争により医療システムの機能が完全に破壊された中央アフリカ共和国、大型ハリケーンによりコレラ蔓延の危機にさらされているハイチ共和国など、私たちは、医療を必要としている人、場所へ医療を届けてまいりました。また、難民危機の大きな要因のひとつであるシリアで起きている非人道的な空爆に対し、世界の医療団ネットワーク全体をあげて署名活動を行いました。日本の皆さまからも多くのご賛同をいただきましたこと、ここにお礼を申し上げます。

緊急時に迅速に現場へ向かい支援を開始し、その後も現地に寄り添った継続的な支援ができたのも、すべて皆さまからのご支援のお陰です。2016年に頂戴しましたすべてのあたたかいご支援に今一度深くお礼を申し上げます。これからも世界の医療団は「医療」と「証言」という2つの使命を掲げ、全力で邁進してまいります。今後とも、私たちの活動へ変わらぬご支援をいただけますよう心よりお願い申し上げます。

世界の医療団 日本  
理事長 ガエル・オスタン

## ◆ 2016年医療ボランティア海外派遣実績

海外支援活動には、医師9名（阿久津麗香、江口智明、岡田朋子、本間康浩、森岡大地、森かおり、山田信幸、與座聰、吉村圭）、看護師3名（石原恵、原田昌子、辻之内幸恵）が参加しました。

### 【医療ボランティアの声】臨床心理士 佐藤綾子

東日本大震災後、あまりの被害の大きさに何か私にできることはないのかと気持ちばかり焦っていたときに、岩手県大槌町にて「こころのケアチーム」として数日参加させていただける機会がありました。それをきっかけに、福島や熊本の被災地でも活動の場を与えていただいています。



福島では、相馬市の「メンタルクリニックなごみ」が主催する「ちよこっつー休みの会」という母子が遊べるプログラムで一緒に親子と遊んだり、相馬ファロアチームに協力する形で中学校でスクールカウンセラーをしたりしました。また南相馬市では南相馬ラーニングセンターで保護者の相談にのったり子どもたちと一緒に遊んだりしました。そのような最中に熊本地震が起こり、被災した子どもたちに安心して遊べる場所の提供と、子どもやその家族の不安やストレスの予防と軽減を目的にした「親子カフェ」が始まりました。必要に応じて相談にのることもありました。福島では、既存の活動に参加しましたが、熊本は一から作り上げていくプロジェクトでしたので、苦労した面もありました。けれど苦労した分皆で作ったプロジェクトだという気持ちで実感できました。このような支援活動を行うことができるのは、皆さまからのご寄付のおかげです。被災地において早期から中長期にかけて活動に参加する貴重な機会をいただいたことを感謝しています。ありがとうございました。

# 中央アフリカ

## 緊急支援



©SEBASTIEN DUIJNDAM

**人間開発指数**  
(188か国中) 187位  
**5歳未満の乳幼児死亡率**  
(出生1,000人中) 130.1人  
**平均寿命** 50.7歳  
**医師の数**  
(国民1万人あたり) 0.5人

アフリカ大陸中央に位置する中央アフリカでは、1960年の独立以来クーデターを繰り返し、暴力に歯止めがかからない状態が続いてきました。医療システムは壊滅状態にあり、首都バンギ市内では、マラリア、下痢、急性呼吸器感染症が流行し、子どもたちの高い死亡率の要因となっています。また、妊娠や出産にまつわる状況も深刻であり、妊産婦の死亡率は10万人あたり882人にも上ります(ユニセフ「世界子供白書2016」)。世界の医療団は、医療によってひとりでも多くの命を救うべく、産科、リハビリセンターを含む既存の4つの医療施設において、医療の質とアクセスの改善、妊娠や出産にまつわる健康や権利の向上、保健システムにおけるコミュニティの役割の強化に取り組んでいます。

# ハイチ

## 緊急支援



©Jean Marc Hervé Abélard

**人間開発指数**  
(188か国中) 163位  
**5歳未満の乳幼児死亡率**  
(出生1,000人中) 69人  
**平均寿命** 62.8歳  
**医師の数**  
(国民1万人あたり) —

2016年10月、カリブ海の島国ハイチを襲った大型ハリケーン「マシュー」。このハリケーンは過去10年間にカリブ海地域で発生したハリケーンのうち最も強いものでした。世界の医療団は1989年よりハイチに介入しており、2010年に発生した大地震のあとはコレラ対策や母子保健などのニーズの高い支援を優先課題として活動を展開してきました。このハリケーンへの対応として、まずコーディネーター、ロジスティシャン、医師からなる緊急支援チームを派遣したほか、緊急キットなどの物資の輸送を行いました。そして、全10県のうち7県において、感染拡大が懸念されるコレラへの対策、プライマリーヘルスケア、妊産婦のケア、栄養に注力してプログラムを組み立て、活動を実施しました。

# 難民

(シリアを中心とした中東・アフリカ地域)

## 緊急支援



©Jenny Matthews

2011年に始まったシリア紛争が大きな要因となり、ヨーロッパに難民が押し寄せる事態が続いています。2016年は、36万人以上が地中海を渡ってヨーロッパに逃れようと試みましたが、そのうち5千人以上の命が失われました(UNHCR発表)。地中海を渡る難民の多くは、ヨーロッパへの入口としてまずギリシャに辿り着きます。世界の医療団ではギリシャ事務局が中心となり、プライマリーヘルスケア、メンタルヘルスケア、女性の性や妊娠・出産にまつわる健康を3本柱とした活動を行っています。特に母子だけで旅をしている人々や性暴力の対象となったりしやすい単身の女性たちへのケアが漏れないよう、パートナー団体と協働しています。また、難民キャンプで働くスタッフは難民たちの悲惨な現状を目の当たりにして精神のバランスを崩しやすいため、スタッフに向けた自身の心を守るトレーニングも実施しています。

**シリア**  
**人間開発指数**  
(188か国中) 134位  
**5歳未満の乳幼児死亡率**  
(出生1,000人中) 12.9人  
**平均寿命** 69.6歳  
**医師の数**  
(国民1万人あたり) 14.6人

# ガザ(パレスチナ自治区)

## 長期支援



**人間開発指数**  
(188か国中) 113位  
**5歳未満の乳幼児死亡率**  
(出生1,000人中) —  
**平均寿命** 72.9歳  
**医師の数**  
(国民1万人あたり) —

周囲を高い壁に囲まれ、人の行き来はもちろん、物資の運搬も難しい状況が続いているパレスチナ・ガザ地区。生活に必要なものは常に足りず、医療機器も薬も圧倒的に不足しています。そのため、十分な医療を提供できる環境などなく、劣化した機器で治療が続けられていたり、薬の使用期限が切れていたりすることもめずらしくありません。このような状況の中、世界の医療団は、ガザに暮らす人々の健康レベルの底上げのため、2002年から現地パートナーとともに活動を実施しています。必要な医療機器や薬の供給をはじめ、現地医療スタッフへの技術トレーニングや住民への健康教育活動、そして、緊急事態への対応を強化するため、医療センターにおいて緊急事態発生時のマネジメント指導を行っています。

# Nepal

## ネパール

### 長期支援



人間開発指数  
(188か国中) 145位  
5歳未満の乳幼児死亡率  
(出生1,000人中) 35.8人  
平均寿命 69.6歳  
医師の数  
(国民1万人あたり) 一

国土の8割を山岳地帯が占めるネパールでは、交通手段が限られているため、山間部に住む女性たちは病院に行くことが難しく、自宅での出産を余儀なくされてきました。また、病気に関する知識の乏しさ、病院にかかるお金がないという経済的な理由、伝統的な女性の地位の低さなどにより、女性たちの医療へのアクセスは阻まれ、出産時に多くの命が失われていました。世界の医療団は、山岳地帯に位置するシンドゥパルチョーク郡にて、マイクロクレジットによって女性たちが自らお金を稼ぎ出産費用を貯蓄できるようにすること、母子保健に関する正しい知識の普及、保健センターの機能向上によって出産を取り巻く環境を整え、女性たちと生まれてくる子どもたちの命を守る母子保健プロジェクトを実施しています。

# Democratic Republic of the Congo

## コンゴ民主共和国

### 長期支援



人間開発指数  
(188か国中) 176位  
5歳未満の乳幼児死亡率  
(出生1,000人中) 98.3人  
平均寿命 58.7歳  
医師の数  
(国民1万人あたり) 一

コンゴ民主共和国で20年以上続いた内戦は、国を破壊し、多くの市民の命を奪いました。現在、首都キンザンシャでは、急激な人口増加による失業率の悪化などの理由により親から育児放棄された約3万人の子どもたちが、路上で身を寄せ合って生活しています。少女たちを狙った性犯罪が横行し、毎月平均61人の赤ちゃんが路上で誕生しています。キンザンシャでは、生まれてくる子どものうち、2人に1人は望まない妊娠によるものとされています。このような状況に対し、世界の医療団は、少女を含む女性の性や妊娠・出産にまつわる健康を最優先課題として活動に取り組んでいます。医療体制を整えることで出産のリスクを軽減するとともに、社会の意識を変えていくため、啓発活動も強化しています。

# Laos

## ラオス

### 長期支援 (小児医療プロジェクト)



©Lam Duc Hien

人間開発指数  
(188か国中) 141位  
5歳未満の乳幼児死亡率  
(出生1,000人中) 66.7人  
平均寿命 66.2歳  
医師の数  
(国民1万人あたり) 1.8人

2012年より南部チャンパサック県で実施した小児医療プロジェクトは、2016年3月末にすべての活動を終了しました。地域の5歳未満児の疾病率と死亡率の削減を目指し、現地医療スタッフへの研修や住民への啓発活動、ラオス政府による妊産婦・乳幼児に対する医療の無料化政策を支援しました。医療サービスが充実し、子どもの健康に対する意識が変化した結果、医療施設を利用する子どもの数が飛躍的に増加しました。チャンパサック県でのプロジェクト終了後、これまでに培った経験他県でも活かすべく、ニーズを見極めるための調査ミッションを行いました。その結果、貧困率と5歳未満児の疾病率が他県に比べて高い北部フアン県が選定され、医療スタッフの小児医療技術の向上を通じた医療サービスの改善・強化、村落健康委員会メンバーの活動を通じた小児疾病予防と対策に関する住民の知識の普及を目的としたプロジェクトを開始しました。

本プロジェクトは資金の一部を「日本NGO連携無償資金協力」の助成を受けて実施しました。

# Myanmar/Madagascar

## ミャンマー、マダガスカル

### スマイル作戦

医療システムが脆弱な開発途上国では、命に関わる治療が優先されるため、形成外科技術の発展の遅れが見られるとともに、形成外科手術ができる医者も非常に少ない現状があります。スマイル作戦では、そうした国々で先天性、後天性の疾患による奇形や機能障がいを持った人々に無償で手術を提供しています。また、日本の医師、看護師とともに現地の医療スタッフが一緒に手術を行うことにより、技術を移転することも目的としています。スマイル作戦は1989年にカンボジアで第1回目を実施され、これまでに14,000人以上に手術を行ってきました。新たにネパールでも開始するべく、2016年は調査ミッションを実施しました。ネパールの医師の数は人口1万人あたり2人と非常に少なく、形成外科技術も未発達です。ひとりでも多くの人の笑顔を取り戻すため、これからもスマイル作戦は続きます。



	ミャンマー	マダガスカル
人間開発指数 (188か国中)	148位	154位
5歳未満の乳幼児死亡率 (出生1,000人中)	50人	49.6人
平均寿命	65.9歳	65.1歳
医師の数 (国民1万人あたり)	6.1人	1.6人

※人間開発指数・平均寿命 Human Development Report 2015 (UNDP)  
※5歳未満乳幼児死亡率 World Health Statistics 2016 (WHO)  
※医師の数 World Health Statistics 2015 (WHO)

# 日本Japan

## 福島そうそうプロジェクト

東日本大震災から5年以上が経過しましたが、今も多くの人が避難を余儀なくされており、目に見えない不安や孤独を抱えて生活しています。世界の医療団は、地震と津波、そして原発事故により大きな被害を受けた福島県沿岸部「相双地区」（相馬市、南相馬市、いわき市）において、被災ストレスなどによる精神的な不調や大震災以前から抱えていた症状などへのニーズに対応するため、現地NPO法人「相双に新しい精神科医療保健福祉システムをつくる会」などととも、2012年1月よりこころのケア活動を行っています。相馬市の「メンタルクリニックなごみ」で月に1回、精神科外来を担当している小綿一平精神科医は話します。「被災者の方とお話すると、忘れ去られることが怖い、だからボランティアの方たちが来てくれるのが本当に心強いということをおっしゃいます。復興には中長期的な支援が本当に必要とされているのです」



## 川内村こころのケアプロジェクト

福島県川内村では、2012年4月に警戒区域解除となり帰村が可能となりましたが、村に戻った人のうち約4割が65歳以上で、若い世代は県内外のほかの市町村に移住する傾向があります。そのため、ひとり暮らしの高齢者も増え、家族との会話が減ったことなどにより、認知症を発症するケースが増えています。世界の医療団は、川内村保健福祉課に精神科医を派遣し、高齢者が暮らしやすい村づくりを助言したり、認知症予防講座や家族相談会を開催したりしています。



「福島そうそうプロジェクト」「川内村こころのケアプロジェクト」は資金の一部を特活ジャパン・プラットフォームの助成を受けて実施しています。

## ハウジングファースト東京プロジェクト（ホームレス状態の人々の精神と生活向上プロジェクト）

2010年から東京・池袋周辺地域で精神的な疾患を抱えながらホームレス状態にある人々の支援を行ってきた「東京プロジェクト」は、2016年から「ハウジングファースト東京プロジェクト」として新たなスタートを切りました。ハウジングファーストでは、「人は誰もが安全な住まいで暮らす権利がある」という考えのもと、まずは住まいを確保することから支援を始め、その後、健康状態の改善に取り組み、地域とのつながりを取り戻し、生活の質を向上させることを目指します。また、2016年4月には、医療部門を担う「ゆうりんクリニック」がプロジェクトに加わり、より細やかな健康のケアが可能になりました。



## ニココロ熊本プロジェクト

2016年4月、熊本、大分地方を震源とする強い地震が断続的に発生し、甚大な被害をもたらしました。発災後直ちに、医師、コーディネーターからなる調査チームを現地へ派遣してアセスメントを実施した結果、本震で震度7を記録した阿蘇郡西原村では、家の片付けや地域の仕事に追われ、子どもたちのケアを十分にする余裕がない大人たちの状況が見えてきました。このような背景から、臨床心理士、看護師、小児科医などの専門家の見守りのもと、子どもたちが安心して自由に遊ぶことができ、大人たちはお茶を飲みながら子育ての話をするなどゆったりとした時間を過ごすことができる「親子カフェ」を西原村など関係団体の協力により設置・運営しました。また、震災による子どもたちへの影響を心配する保護者や教育関係者に向け、児童精神科医や臨床心理士による講習会を開催しました。



人間開発指数	(188か国中)20位
5歳未満の乳幼児死亡率	(出生1,000人中)2.7人
平均寿命	83.5歳
医師の数	(国民1万人あたり)23人

※人間開発指数・平均寿命 Human Development Report 2015 (UNDP)  
※5歳未満乳幼児死亡率 World Health Statistics 2016 (WHO)  
※医師の数 World Health Statistics 2015 (WHO)

# 証言活動

東日本大震災、福島第一原子力発電所事故から5年目の節目を迎えた2016年、4月には熊本地震が発生し、国内自然災害プロジェクトに関連する発信が多い1年となりました。

熊本地震については、小児科医の監修のもと、被災地域医療や行政の意向を汲みとった表現を用いながらも、プロジェクトの目的を損なうことのない情報発信に努めました。世界の医療団日本が実施する他のプロジェクトについては、メディアへの露出だけに限らず、講演、執筆、報告会など様々な場面において、現場で活動する医療ボランティアたちからの言葉をより活発に、そして効果的な発信に繋ぐ証言活動を実施しました。スマイル作戦については、外務省主催の写真展においてマダガスカル・ミッションで撮影された写真が優秀賞を受賞、2017年にかけて各地で展示される予定となっています。

国際情勢では、難民受け入れ危機がさらに深刻化、これまでにない人道危機といわれるまでになりました。世界各地でテロの脅威は深まり、シリア、イエメン、スーダンなど紛争地域における情勢もめまぐるしく変化、イギリスのEU脱退、アメリカ大統領選挙など各国の政局も大きく揺れた激動の年となりました。こうした世界の情勢や時事問題についての関心が高まり、SNSなどを通じて市民が意見を発信する機会が日本においても飛躍的に増えました。多様化する情報社会の中、思想や宗教にとらわれることなく人権が侵害されている事実を正確に伝えていくことを第一に、今後も証言活動を行ってまいります。

## イベント(抜粋)

### ■ブース出展

アースガーデン灯・秋/アースデイ/グローバルフェスタ/CPhI japan  
フレンチブルーミーティング/よこはま国際フェスタ 他

### ■チャリティイベント

クリスマスチャリティ抽選会/支援者の集い/東日本大震災チャリティイベント

### ■活動報告会



©Chise Umemura

## キャンペーン

■下記のキャンペーンを計44か所の施設・イベント会場にご協力いただき、延べ50回開催しました。

### ◎1000人のスマイル作戦キャンペーン

「スマイル作戦」で治療を受ける子どもたちとその家族に向けてメッセージを贈って応援するキャンペーン



### ◎なみだを笑顔にキャンペーン

医療が受けられずに健康が失われている世界の子どもたちの現状をパネルで紹介するとともに、その子どもたちを笑顔にするにはなにが必要なのかを一緒に考える啓発キャンペーン



### ■シリア・アレppoを救え！緊急署名活動

シリア・アレppoへの非人道的な空爆に対し、各国政府に積極的な働きかけを求めるため、緊急署名活動を実施しました。

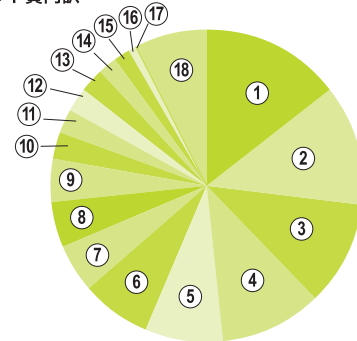


# 2016年度決算

世界の医療団は、1名の監事による会計及び業務の内部監査と、外部の独立した公認会計士による会計監査を毎年度受けています。

収入(単位:日本円)	210,316,511	支出(単位:日本円)	201,767,631
寄付	143,848,430	プロジェクト費(医療支援+証言活動)	144,750,372
助成金	64,943,813	募金事業	50,907,944
収益事業	843,535	商標権使用料等事業	872,145
謝礼(ほか)	455,733	管理費	5,237,170
会費	225,000		

## ◎プロジェクト費内訳



①シリア / 緊急支援プロジェクト	14.6%
②ラオス / 小児医療プロジェクト	12.6%
③熊本地震被災地支援プロジェクト	10.7%
④ハウジングファースト東京プロジェクト	10.5%
⑤東日本大震災被災地支援プロジェクト	8.0%
⑥スマイル作戦	7.4%
⑦コンゴ民主共和国 / リプロダクティブヘルス	5.0%
⑧ハイチ / 緊急支援プロジェクト	4.7%
⑨中央アフリカ / 緊急支援プロジェクト	4.5%
⑩ソマリア / 妊産婦と乳幼児の診療	2.8%
⑪ニジェール / 母子保健プロジェクト	2.5%
⑫ガザ(パレスチナ自治区) / 緊急支援プロジェクト、プライマリーヘルスケア	2.4%
⑬ソマリア / プライマリーヘルスケア、母子保健プロジェクト	2.4%
⑭フィリピン / 電子廃棄物の有害物質から子どもを守るプロジェクト	2.1%
⑮ネパール / 母子保健プロジェクト	1.5%
⑯マリ / プライマリーヘルスケア	0.8%
⑰その他	0.01%
⑱証言活動*	7.5%

\*ニュースレター発行、MdMの活動紹介イベント、写真展など開催、NGOイベントへの参加等  
世界の医療団は「認定NPO法人」として東京都より認定されています。  
世界の医療団へのご寄付は税制上の優遇措置を受けることができます。

## 政策提言(アドボカシー)

■厚生労働省へ国の年末年始の生活困窮者の支援施策の整備を求める要望書を提出し、意見交換を行った。

■フランスよりゲストを招き、東京と大阪でハウジングファースト国際シンポジウムを開催した。